

てき・エロ *te quiero.*

— セックスのことになると嘘をつく人間の記録と征服と服従を繰り返す人類の記憶について —

作／上岡久美子
Kumiko ueoka

〈タイトル〉

てき・エローセックスのことになると嘘をつく人間の記録と征服と服従を繰り返す人類の記憶について―

※タイトルはスペイン語の *Te quiero.* (テ・キエロ＝愛しています)の発音から命名

〈上演〉2019年9月22日@広島市男女共同参画推進センター ゆいぽーと 音楽練習室1・2で
リーディング公演

〈登場人物〉

大城イリカ／女（おおしろいりか／35歳）

比嘉フアビアン／男（ひがふあびあん／27歳）

綾部みか（あやべみか／33歳）

一瀬貴史（いちのせたかふみ／45歳）

花田良介（はなだりようすけ／35歳）

出山仁美（いでやまひとみ／50歳）

出山朗（いでやまあきら／53歳）

フラナガン康江（ふらながんやすえ／80歳）

森脇一馬（もりわきかずま／41歳）

高木優里子（たかぎゆりこ／36歳）

〈注記〉

- ・ A、Vで括るテキストは字幕表示してもよい。または、役者が発話、音読してもよい。
- ・ 外国語のセリフは、字幕表示用に（ ）内に日本語訳を記載している。この字幕表示言語と役者が発話する言語が逆転してもよい。

【1. 女と男（イリカとファビアン）／ホテルの屋上】

女（イリカ）と男（ファビアン）がホテルの屋上にいる。

何か儀式を執り行うようにダンスを踊っている。

女、動きを止め、男に足を差し出す。

女 足。

男 足？

女 持つて。

男 持つ？縛る？

女 縛らない。

男 縛らない。持つ。

女 足首握って。

男 （女の足首をぎこちなく握り）足首握る。

女 そう、そんな感じ。

男 そう、こんな感じ。

女 キスして。

男 （女の片方の頬にキスしながら）永遠を。

女 （キスされた反対側の頬を男に差し出し）永遠に。

女、自分の弟であるかのように男をやさしく抱く。

女 大丈夫また会える。

男 また会える。

女 復活する。

男 復活する。

女 チャックモールが到着したら、

男 チャックモールが到着したら、

女 始める。

男 始まる。

女 始めましょう。

【2. 綾部みかインタビュー／喫茶店】

綾部 ……何回目……。 (笑う)。 え？ううう。えー。マジ

ヤバ (笑う)。忘れてるし……。そんなんじやなくって、そんなんじやなくって、最初はね、ちゃんと数えてるの……。 るんです。何回やったかなー、なんて、1っ回、2回、3回、この前、2回イッたから、4回会ったけど、5回、とかね。……。数えてるモンなの。…ヤバ忘れてるし。えー

一瀬 ……あ、その回数じゃなくって (笑う) 何回会ったか、か (さらに笑う)。あ、分かんなかったらせんぜん。場所は？

綾部 あー… (笑う)。 笑う？ 笑うよね。笑わないですよ。プリンスホテル (爆笑)。 ベタだよねー、ベター。バブルん時の小説？ 官能小説？ 笑うよー。

…笑わない？ まあ、そんなだったんだよね。私たち。同じフロアにいる同僚だし。昼間、昼間専門だし。ほら、チャツチャって感じ？ でも、昼間っからラブホってやじゃない。夜もラブホって…。 入ったことあります？ ありますよね？ ラブホ。ラブホって結局、セックスの場所がない人？とか。複雑な関係の人とか。フツー、彼氏ん家ですよ？ やっぱセフレだから、ちゃんとしたところじゃないじゃないっすか。しない。でも、ラブホも嫌だし、昼間っから…。だから、せめてちゃんとしたホテルのご休憩タイム利用して。まあ結局ラブホ使用と同じなんだけど、せめて…。ね？ 違うって思いたいじゃないですか？

一瀬 どちらからセフレになろうって言ったの？

綾部 ……うーん。こっち？ 向こう？ うーん、みたいな (笑い)。 なんとなく。うん、なんとなく、そういう…。 ほら、ウチら割とストレスたまる職種って言うか。MRって知ってます？ 医薬情報担当者のことなんですけど、仕事のほとんどが医師の待ち時間ですよ。大学病院の廊下とかですつと直立不動で立ってるんです。たまに、診察室から出てきたら、「先生！」つって、その後ろついていって、カルガモみたいに。「違う、違う、トイレだトイレ！ シツシツ」

て、犬みたいに追い払われて。むっちゃストレスフル。で、いるんですよ、営業
なんで、時間好きにできるから。男女のコンビで動いていると、上司と昼間っか
らラブホなんて。あ、ウチら、違いますけど（ケラケラ笑う）。

一瀬 言いたくない？

綾部 え？

一瀬 それで、その日は？どっちから。

綾部 あ、たまたま、オフィスにいて。花田君からラインで「出れる？」って来て。花
田君がいる方見るとスマホいじってた。だから、オフィスでライブ、みたいな。
いいよ、どこ行く？って。で、チャツチャとプリンスホテル。近いから。でもタ
クシー使ったけど。

一瀬 一緒に乗ったの？

綾部 まさか……。花田君は歩いて来たみたい。ちよつと、汗ばんでたから……。

はは、昼間っからエロいよね？汗（笑う）

一瀬（笑う）

綾部 まあ、シャワーも浴びずってヤツ？ もう何回もしてるし。要領分かってるし。
時間がないのが一番だけど、まあ、しましようか、って、お互い服脱いでいる時
に、スマホ鳴って、一応、鳴るようになっているんですよ、仕事中なんで、一応
（笑う）。で、花田君が、窓の方へ行ってスマホで話しているんだけど、急に。

花田 え？

綾部 ……背中向けたまま動かなくなった。

一瀬 ……

綾部 あとは「はあ」とか「うん」とか「ああ」とか……なんか……

一瀬 なんか？

綾部 ボーゼン、ジシツ、っーか……

一瀬 ……

綾部 で、いきなり振り向いて

花田・綾部 イリカが死んだ。

綾部 っつて

一瀬 ……

花田・綾部 イリカが死んだ。

綾部 っつて、私に。

一瀬 共通の知り合いだった。

綾部 ぜんぜん。

花田 イリカが死んだ！

綾部 （花田に）っつて、誰？！

花田 ……

綾部 （一瀬に）信じられる？

花田、泣いている。

綾部 泣き出してさ。泣くのよ。で、私のこのへん（上腕部）掴んで

花田 （綾部の両腕を掴み）イリカが死んだ、イリカが死んだ、イリカが、

綾部 痛い！てば！！（花田の手を振り払う）

花田 ……

綾部 誰、それ、イリカ？女？

花田 ……

綾部 その時に花田君は同期なんだけど、転職組だな、っつて思い出して、

一瀬 前の職場は？

綾部 マスコミ？新聞記者だったみたい。

一瀬 へー。業界紙？

綾部 全国紙。

一瀬 へー。すごいじゃない。なんで辞めたの？

綾部 さあ…

一瀬 普通、辞めないよね。全国紙の記者っつて。

綾部 ……うん…

一瀬 辞めて、MR？ 医者ケツ追っ掛けて新薬売り込む仕事？ 辞めないよね？

その逆だったらあるけど。MR辞めて新聞記者。

綾部 ……ま、とにかく。「前の職場の人？」っつて聞いたの。

一瀬 そしたら？

花田 俺、どうすればいい？

綾部 って聞いてくるから、（花田に）どうすればいいって……

花田 俺、どうすればいい……

綾部 電話したら？

花田 電話？

綾部 電話。

花田 誰に？

綾部 だから言わなきゃいけない人に。

花田 言わなきゃいけない人。

綾部 うん。その人が死んで、伝えなきゃいけない人っている？いるよね。お通夜とかお葬式とか呼んだ方がいい人。

花田 ……

綾部 うん。私だったらそうする。うん。

花田 うん。

一瀬 で、電話した？

綾部 また、窓際に立ってスマホで電話かけてた。

一瀬 出た？昼間っから（笑う）

綾部 出た！昼間っから（笑う）

出山登場。スマホに応答する。

花田 （通話の相手である出山に）あ……俺です。花田です……今いいです

か？……あ、元気です。元気……。あの……さつき森脇さんから連絡があつて。

綾部・花田（同時に）イリカが死んだ。

出山（同時に）イリカが死んだ？！

綾部 男の人の声だった。

一瀬 それは、確か？

綾部 うん。電話口から漏れるほど、驚いていた。「なんで?!マジか」って(笑)

花田 あの・・・いや・・・自分も今聞いたばかりで・・・知らないっすよ!

出山、声を立てて笑う。

綾部 なんか、不穏な空気になって

花田 アンタ!・・・アンタ、人間じゃない!!(スマホを投げ捨てる)

綾部 (スマホを投げ捨てる真似をしながら)バン!って

一瀬・・・

綾部 大丈夫?って一応聞くよね。セフレだけど(笑う)

一瀬 (笑う)

花田 ごめん・・・こっちから誘ったのに・・・

綾部 あー、別に・・・帰ろっか(服を着始める)

花田 ごめん

花田、綾部をベッドに押し倒す。

押し倒したまま、動かなくなる。

一瀬 で?

綾部 (花田の髪をなでながら)この姿勢のまま

一瀬 どれくらい?

綾部 さあ・・・

一瀬・・・服着て?

綾部 服着て

一瀬 どうやって終わったの?

花田 (身体を起して)ごめん

綾部 え?

花田 悪かった。

綾部 ……え？

花田 本当にごめん。

綾部 ……

花田 もう、迷惑かけない。

綾部 迷惑…

花田 ごめん（服を整えて出て行く）

綾部 ……

花田が去った方向を見つめる綾部。

一瀬 大丈夫？

綾部 ……え？

一瀬 大丈夫、だった？

綾部 ……何が？

一瀬 いや…でもよかったじゃない。

綾部 は？

一瀬 好きな人とただ抱き合って。

綾部 セフレだよ。

一瀬 ああ…

綾部 セフレ

一瀬 ……

綾部 お互い割り切ってるし。

一瀬 割り切っているんだ。

綾部 そう。

一瀬 そう。

綾部 ……

一瀬 タフなんだね。

綾部 え？

一瀬 いや。すごいな、と（笑う）

綾部 ……。聞きたいこと聞けた？

一瀬 だいたい。

綾部 で、イリカって誰？

一瀬 ……

綾部 イリカって誰よ？！

一瀬 花田良介に見捨てられた女

綾部 ……

一瀬 花田良介が見殺しにした女

イリカと出山が会おうシーン。

出山、イリカに近づき背中に隠していたブーケをイリカに差し出す。

イリカ、驚いて受け取る。

出山、愛おしそうにイリカを見つめる。

少し離れた距離からその二人を花田が見ている。

【3 出山仁美インタビュー／出山自宅】

出山家のリビング、出山仁美と差し向いに座る一瀬。

仁美、客人を前にぼんやりとしている。

一瀬 (咳払い)

仁美 あ…。何か飲まれます？

一瀬 ……あ、いえ

仁美 ブランデーとかウイスキーとかスコッチとか。何でも。遠慮なく。

一瀬 (持参したお茶のペットボトル見せ) どうぞ、お構いなく。

仁美 ああ…。

一瀬 私に遠慮なく、どうぞ。

仁美 ……そう？ じゃあ…。(ウイスキーのソーダ割りを作る)

一瀬 こうやって、飲んでらっしゃるんですか？ ご自宅で。

仁美 飲んでるわね。昼間は。誰も止める人いないんで。

一瀬 ……

仁美 ウソ。夜も止める人いないわ（笑う）

一瀬 ご主人は、出山さんは何と？

仁美 主人……いやいや（笑う）お留守ですか。（天井を見上げる）。……あ、今なんて言った？

一瀬 奥様がこうやってアルコールを消費されていることに関して、ご主人は、なんとおっしゃってますか？

仁美 何か言う……？ 主人が……？（ぼんやりと上を見る）

一瀬 ……奥さん？

仁美 あ……盆暮れの頂きものの整理できて、よかったと思っっているんじゃないかしら。

一瀬 ……

仁美 （名刺を見て）一瀬さん。

一瀬 はい。

仁美 フリージャーナリスト。

一瀬 はい（笑う）

仁美 ジェンダー問題、スポーツ、Web、競馬、グルメ、

一瀬 はい、何でもあります。

仁美 主人、何かしましたか。

一瀬 あ、いえ……。どうして、そう思いました？

仁美 だって……ウチにアナタみたいな人が来て、お話しがあるって、主人のことしかないじゃないですか。

一瀬 ああ……いやいや（笑う）お留守ですか。

仁美 ええ、ほとんどお留守です。

一瀬 ご主人のお留守に、よく入れてくれましたね。

仁美 ええ？

一瀬 胡散臭いですよ。フリージャーナリストなんて。得体が知れない。

仁美 ああ、主人のお知り合いかと思って……

一瀬 追い返しますね。私だったら。追い返しますよ普通。

仁美 ……

一瀬 強盗かもしれませんよ。

仁美 ……え？

一瀬 ……

仁美 ……強盗……なの？

一瀬 (吹き出す) いや、違います。違います。

仁美 ああ！ びっくりした。

一瀬 ご主人は、私の大先輩です。

仁美 あら、まあ、じゃあ。

一瀬 はい、私は10年あとにご主人と同じ新聞社に入社しました。しかも、同じ大学で同じ学部出身です。

仁美 じゃあ、京都で？

一瀬 はい、ゼミも同じ新聞研究。学生時代から出山さんが書いた記事を読んで憧れていました。

仁美 やっぱり主人とお知り合いなのね。

一瀬 いえ、私は存じ上げていますけど、出山さんの方はどうかなあ……。

仁美 あ、そうなの……

一瀬 あ、でもホントに強盗じゃありませんよ。

仁美 やだ、もう(笑う)

一瀬 (笑う) いや、すみません。

間。

仁美 アナタ、何か違うわね。

一瀬 え？

仁美 主人の周りにいる人と雰囲気が違うわ。

一瀬 どう違いますか？

仁美 ……分からないけど、ちょっと違う。自由な感じがする。

一瀬 ご主人は自由ではありませんか？

仁美 彼は……自由ね……。(天井を見上げる)

一瀬 上、

仁美 ……え？

一瀬 いや、さつきから。二階、気になります？

仁美 いえ・・・

一瀬 上に何か・・・

仁美 フリージャーナリストさんって大変なんでしょうね。

一瀬 ええまあ、家族がいると。

仁美 あら、お子さんは？

一瀬 女の子がひとり。

仁美 ウチも女の子。

一瀬 ええ、はい。

仁美 ええ？・・・ああ、そうよね。よくご存じよね？ウチのこと。ジャーナリストさ
んですものね。フリーの。

一瀬 (笑う)

仁美 ご用件は？娘が帰ってくる前に。

一瀬 ああ・・・ご主人の部下で森脇一馬という記者がいたのをご存知ですか？

仁美 森脇さん・・・さあ・・・

一瀬 社会部時代の兵隊なんです。

仁美 存じ上げません。その方がどうかしましたか？

一瀬 ええ、ご主人から150万円を受け取ったそうです。

仁美 ・・・・はい？

一瀬 はい。

仁美 どういうこと？

一瀬 あ、私はてつきり・・・

仁美 てつきり、何？

一瀬 いえ・・・

仁美 私がそのお金を出したと？

一瀬 あ、そうかなあ、と。

仁美 何だよ・・・

一瀬 奥さんではない。

仁美 当たり前です。

一瀬 ああ・・・困ったな・・・

仁美 ……？

一瀬 あ、実は今、森脇君から預かってきているんですよ150万。

仁美 は？

一瀬 やはり受け取れないと。返ってきて欲しいと、だから奥さんに、

仁美 どうして私なの？

一瀬 いやあ……

仁美 夫の尻拭いをするための私がお金出したってそういうこと？

一瀬 あー、まあ……

仁美 (ため息)

一瀬 あの、この150万みたいなこと、よくあったんですか？

仁美 ジャーナリストさんなら何もかも調査済みなんじゃないですか？主人が女癖悪いのは知っているんでしょ？

一瀬 あ、いや……

仁美 次から次へと……何度お金を用意したか分からないわ。

一瀬 どうして別れないんですか？

仁美 え？

一瀬 不貞行為なんですから、むしろ奥さんが慰謝料を請求できるじゃないですか。

仁美 ……実家が別れるなど言うの。

一瀬 ……はあ

仁美 お若いから分からないかもしれないけど、

一瀬 私とそんなに年変わらないですよ。

仁美 とにかく、ウチはそうなの……それに……

一瀬 それに？

仁美 15、6年ぐらい前からもうずっと他人みたいなものよ。

一瀬 一緒に暮らしてて他人？それは違うんじゃないのかな。

仁美 本当よ。もう私に触らないでってお願いしたの。月々15万円あげるから、外で生きてって。

一瀬 へえ……で、ご主人は？

仁美 ……別に。何も。

一瀬 年間180万。

仁美 すごいわね（笑う）

一瀬 そのお金ってどこから・・・

仁美 実家よ。孫の教育費だ、私の趣味のお金だって適当に言っ（笑う）

一瀬 甘いご両親ですね。

仁美 甘いのよ（笑う）

一瀬 でも今回、森脇君に渡した150万は年間予算をほぼカバーする金額になる。

仁美 これまで渡したお金を使わず貯金してたのかしら？ まさかね（笑う）

一瀬 ご主人、春の人事異動で、ご栄転されますよね？

仁美 さあ・・・

一瀬 順風満帆の人生だ。

仁美 そんなこと・・・

一瀬 一流大学を卒業して、全国紙の新聞社に就職、資産家のお嬢様と結婚。会社では地方支局から東京本社、社会部デスクの時は新聞協会賞を受賞した。その後は政治畑に進み、次の異動で東京本社政治経済部長に就任。まさに出世街道まっしぐら。

仁美 しかも、妻からお小遣いもらって浮気のし放題（笑う）・・・ああ・・・（上を見る）

一瀬 ・・・・奥さん？

仁美 ・・・・あ・・・

一瀬 こちら、このお家。中古ですか？

仁美 ここ、私が生まれた家なの。

一瀬 はー、だからこんな東京の一等地に一軒家。

仁美 主人は婿入りみたいなのなの。

一瀬 へえ、そうなんですか。

仁美 両親から譲り受けて新婚からここで暮らし始めた。古い家だけど、この立地で庭もある家を持つなんて普通のサラリーマンには無理でしょ？

一瀬 奥さんの思い出が詰まった家なんだ。

仁美 主人は新築して郊外に引っ越そうって言うけど私が嫌なの。埼玉とか千葉とかの生活って想像できない。

一瀬 私、住んでいますけど神奈川いいですよ。海があつて山があつて。

仁美 あらそうステキね。でも、そういうのに興味ないの。

一瀬 なんかなり意外だなあ。

仁美 え？

一瀬 いや、職場では独壇場でも家では奥さんが主導権握っているんだ。この家で出山さんの居場所あるのかなあ……

仁美 あるわよ。

一瀬 ありますか？

仁美 あります。彼の部屋が。

一瀬 え？どこに？

仁美 ねえ一瀬さん、ウチのプライバシー聞いてどうするの？どっかに書くの？

一瀬 いや、今日は取材ではなく……このお金、どうしましょうかね。

仁美 どうしましよかって……いりません。そんなお金。

一瀬 ですよ？森脇になんて言おう……

仁美 どういうわけで一瀬さんが関わっているのですか。

一瀬 森脇は、私の後輩で、転職して今はWebメディアで働いているんですが、この前、久しぶりに連絡あって新橋の居酒屋で会ったんですよ。その時にご主人から預かったお金を返してきて欲しいと。

仁美 預かった？

一瀬 いや、正確にはもらったらしいんですが……

仁美 どうしてあなたに言うの？

一瀬 なんかなり直接会いたくないそうです。出山さんに。

仁美 は？

一瀬 ま、後輩の頼みですので嫌とは言えず……

仁美 何それ、バカみたい。

一瀬 いやあ……。奥さん、立ち入ったことをお伺いしていいですか？

仁美 もう随分立ち入ったこと聞いているじゃないですか。

一瀬 (笑う)……ご主人のお知り合いの女性の名前とかご存知です？

仁美 何かと思ったら……知りません。

一瀬 イリカという女性の名前を聞いたことがありますか？

仁美 イリカ……日本人？

一瀬 日系のメキシコ人。沖縄移住者の三世です。

仁美 ・ ・ ・ イリカ ・ ・ ・

一瀬 ・ ・ ・

仁美 (上を見上げる) あ ・ ・ ・

一瀬 ・ ・ ・

夜明け前。

キッチンドラんカーの妻。

玄関の鍵が回る音。

玄関が開く音。

二階へ上がる足音。

ドアが開く音。

ドアが閉まる音。

ベッドに肉体が投げ出される音。

妻の頭上で、規則的にベッドが軋む音が聞こえる。

仁美 古い家だから軋む音がする。あのひとの気配、あのひとの足音、音、音、耳をす

まして聞くの、あのひとが帰ってきた、あのひとがいる。

一瀬 ・ ・ ・

仁美 私はお酒を飲みながら待っているの。音が聞こえてくるのを。あのひとの気配を感じたら不思議とすーっと眠りにつける。目が覚めた時はあのひとはいない。同じ家に住んでいるのにもう何年も会ってないような気がする。でも、いいの。音が聞こえてくるから。

一瀬 ・ ・ ・

仁美 ある日、いつものように明け方、あのひとが帰ってきた。ぎいー、ぎし、ぎし、ぎし、ぎいー、どん、ぎし、ぎし、ぎし、大きなあのひとの身体がベッドで揺れる音、ぎし、ぎし、ぎし、どこで、そうやってベッドを揺らしてきたのかしら。

お酒飲みながら聞くの。天井から聞こえてくるその音の子守歌に私はここでうたた寝をした。どれくらい寝たかしら、いきなり二階から

出山 イリカが死んだ？！

仁美 大きな声が聞こえてきた。

一瀬 イリカが死んだ？

仁美 そう

一瀬・仁美 イリカが死んだ。

仁美 そのあと、

出山・一瀬・仁美 なんて？！マジか

出山だけ続けて笑う。

仁美 ……え？

一瀬 あ…失礼。

仁美 どうして？

一瀬 あ、いや、びっくりして…

仁美 ……

一瀬 それから？

仁美 階段の上の様子を伺いに玄関に行った。

一瀬 話の内容は聞き取れましたか？

仁美 それからはよく聞こえなかった…けど、

一瀬 けど？

仁美 ……なんだか、楽しそうだった。

一瀬 ……

仁美 考えたら不謹慎な話よね。人が死んだというお知らせなのに。

一瀬 ……

仁美 あのひと、なんであんなに楽しそうだったんだろう…

一瀬 ……お金、持ち帰りますね。

仁美 主人に突き返してみたら？喜ぶと思うわよ。お金大好きだから。

一瀬 いじらしいなあ。

仁美 誰が。

一瀬 いや、奥さん。

仁美 はあ？

一瀬 こうやって古い家に住み続けるのもアレですよ、新しい家は軋む音しませんも
んね。ご主人が帰ってきたのが分からない。

仁美 ……は？

一瀬 いや、愛を感じるなあ、と…

仁美 愛…そんなものどつくにないわ。

一瀬 本当に？

仁美 本当よ、仕方ないから一緒にいるの。

一瀬 ……本当に？

仁美 ……

一瀬 ご主人、戻ってくるというんですね。

仁美 ……何言ってるの。

一瀬 (笑う)

仁美 イリカって誰なの。

一瀬 ……

仁美 主人の何なの。

一瀬 ……あー！

仁美 言いなさい。

一瀬 モノ？

仁美 は？

一瀬 とか…道具？

仁美 道具。

一瀬 はい。

仁美 どういう意味？

一瀬 いや、ご主人の…

仁美 ……おもちゃ？

一瀬 ああ…おもちゃ。はは…

仁美 ……

一瀬 あ、失礼…

問。

仁美 娘がお腹にいた頃、彼、浮気したの。職場の同僚と。私より10歳も若い東大卒の女の子だった。私、泣いたわ。泣いて泣いて彼をなじったわ。そしたら彼、何て言ったと思う？

一瀬 ……なんて？

仁美 「自分に正直でいたい」って。

一瀬 ……

仁美 臨月だったのよ。

一瀬 ……

仁美 私、どうにかなりそうだった。

一瀬 ……

仁美 ああ………（天井を見上げる）

一瀬 ……奥さん？

仁美 （天井を見つめたまま）帰って。私の家から出てって。

一瀬、仁美を残して去る。

【4. ファビ안의バル】

一瀬、ファビ안의バルへ行く。

バーテンのファビアンが待ち構える。

ファビアン いらっしやい。

一瀬 ……

ファビアン ウイスキー&ソーダ？ ジン？

一瀬 （頷く）

ファビアン （ジントニックを作り始める）

一瀬 会って来た。

ファビアン ……全員？

一瀬 いや、女二人だけ・・・
ファビアン・・・
一瀬 クソみたいだ。
ファビアン クソ（笑う）
一瀬 クソだクソ。
ファビアン （グラスを差し出し）ジントニツク。
一瀬・・・
ファビアン ほら、座れよ。
一瀬・・・
ファビアン アミーゴ。
一瀬 （笑顔を見せる）ああ、いいね、その言葉（カウンターに座る）
ファビアン 俺が育った国では一番大切な言葉だ。友だちがいない男は軽蔑される。
一瀬 この国は友だちがいない男だらけだ。
ファビアン だから、クソなんだ。
一瀬 だから、あんなクソのために死ぬことなかったんだ・・・
ファビアン 一瀬、お前は最高のアミーゴだ。
一瀬・・・
ファビアン だけど、間違ってる。イリカは死んでない。
一瀬 え？
ファビアン 復活する。
一瀬 復活・・・
ファビアン ああ・・・復活する。
一瀬、酒を飲み干し、店を後にする。

【5. ファビアンの独白】

へ比嘉ファビアンの独白く

実際に見てきたことか、夢なのか、私の記憶の中にある話をしよう。

私たちは蛮族に土地を追われ、砂漠に辿り着いた。そこにケツアルコアトルの神が現れて「蛇を啜えた鷲が舞い降りたあの場所に町を作るがいい」と告げた。私たちは蜃気楼の彼方にあるご神託の場所をこの目に焼き付け、そこを目指し、三日三晩、砂漠を歩き通し、ついに辿り着いた。いや、辿り着いたことにした。私たちは疲れ果てていたし、とりあえずここが目的地だということにしなければ、この旅の終着点は来ないと思ったので、誰かが「ここだ！」と断言するのをお互い探るような目で見ていた。だから、私が「ここだ！」と高らかに宣言した。長老が不安そうに「その鷲は蛇を啜っていたか」と確認してきたので、私は「確かに！」と言いつつ切った。

そう、誰かが適当な嘘をつかないと、この世界は回っていかない。

私たちは、沼地に石畳の道路を渡し、基盤を築いてまずは司祭たちの神殿を作った。ちようど夏至、冬至に太陽の影が蛇の形になるよう北極星から35度の向きに建立した。さらに、我々は太陽神を信奉しているので、太陽が戻ってくるよう毎日、生贄を捧げなくてはならない。その生贄は、処女であることが求められ、美人であれば尚良しとされた。

独白の途中で、イリカと出山が登場。

ファビアンの独白内容とシンクロするように、出山がイリカの身体を弄ぶ。

生贄は子どもの頃に選定され、処女の状態を保持するため特別施設に隔離され、王侯貴族のような待遇を受ける。いよいよ生贄とされる日、処女は聖水で沐浴し、豪華な衣装で着飾られる。生贄にされる場所である巨大なピラミッドの長い階段を太陽に向かって自力でよじ登る。

神殿の頂上は狭い正方形のスペースになっていて、そこにチャックモールの台座が鎮座している。チャックモールの顔は、なぜか嬉しそうな笑顔を浮かべている。このチャックモールの石の台座の上で、着飾った処女は司祭たちに足と足、手と手、頭を羽交い絞めにされて生きたまま心の臓をナイフでえぐり取られる。そのまだ脈打つ心臓を一番偉

い司祭が太陽に掲げて祈りを捧げる。心臓をくりぬかれた処女は生きているのか死んでいるのか分からないくらい激しく痙攣し、体中の穴という穴から液体を垂れ流し、白濁した目は大きく見開かれている。その状態で、足担当の司祭は素早く足首、くるぶし、ももの付け根と順番に切断し、手担当の司祭は手首、肘、腕の付け根と手際よく切り取り、そして、頭部に至っては、一番大きなナイフを手にした司祭が首の付け根に刃を立て、ゆっくりと右から左へ移動させて胴体から完全に切断する。そのバラバラになった体のパーツをすべて神殿の下に投げ飛ばして地べたで待ち受ける人びとに食物として提供する。これが毎日、繰り返される。太陽神の生贄となった処女の亡骸は民衆の栄養分となり、夜が明け、太陽がまた戻って来るのだ。

そうやって私たちは何百年も私たちの秩序の中で平和な日々を過ごしていた。そう、ヤツらが到着するまでは。

一の葦の年、東の大地から白い神が現れた。

そして、世界がひっくり返った。

【6. フラナガン康江インタビュー／シンポジウム会場のロビー】

一瀬を目の前にして老眼鏡越しに名刺を見る康江。

康江 一瀬貴史・・・さん。ジャーナリスト。

一瀬 はい

康江 どこかで会ったことある？

一瀬 (微笑む)・・・

康江 英語しゃべれる？

一瀬 英語、ですか？ 学校で学んだ程度で、

康江 じゃあダメね。日本の学校教育は最低なもの。

一瀬 はあ(笑い)

康江 私ね、日本語を棄てたの。英語が分かる人とは英語で話すようにしてるの。

一瀬 どうしてですか？

康江 嫌なのよ。日本語で考えるのも話すのも。もう嫌なことしたくないの。この歳で、あとは死ぬだけなんだから。

一瀬 (苦笑い) アメリカへ移住したのは戦後ですか？

康江 広島で被爆して全身にケロイドを負ったわ。特に顔が酷かった。1955年に原爆乙女としてアメリカに渡ったわ。7回整形して元の顔より美しくしてもらった。おかげでハンサムなアイルランド系の会社経営者と出会って、今じゃ11人の孫を持つおばあちゃんよ。

一瀬 ビッグファミリーだ(笑う)

康江 日本に留まらなくてよかったって思うのよ。アメリカには感謝している。

一瀬 結果的に、ですよ。

康江 ……皮肉屋ね。

一瀬 え？ そうですか？(笑う)

康江 シニカル。アイロニカル。そして、とつてもおりこうさん。

一瀬 ははは、ありがとうございます。

康江 ホメてないわよ。私も皮肉屋だから。

一瀬 あ、すみません。

康江 本題に入ってちょうだい。年寄りには時間がないの。

一瀬 イリカという名前の女性を知っていますか？

康江 イリカ……

一瀬 ……大城イリカさん。

康江 ああ……。あの日系何世かのお嬢さん？

一瀬 はい、あの、いっどこで出会ったのか覚えてらっしゃいますか？

康江 私が被爆者団体の招きで来日した時、国際シンポジウムで彼女は南米の日系被爆者団体のスペイン語通訳で来ていたわね。

一瀬 いっごろの話ですか？

康江 10年前くらい？ まだ60代だったかしら。

一瀬 今、おいくつですか？

康江 あら、女性に年齢を聞くの？

一瀬 すみません。取材の一環で、

康江 言わないわよ。ちゃんとヒントをあげたんだから。

一瀬 はあ・・・その国際シンポジウムでどのようにしてお会いしたんですか？

康江 私、飽き飽きしていたのね。

一瀬 え？ 何に？

康江 そのシンポジウムに。核兵器のない世界という実現不可能な空虚なプロパガンダにね。

一瀬 実現不可能ですか？

康江 ええ、そう思うわよ。あなた知ってる？ 国際シンポジウムって政府が後ろ盾になっっているのよ。善良な市民に対するポーズ？ もしくは不満分子へのガス抜きのため。その政府が裏で何してるかって言うと、アメリカから何兆円も戦闘機や軍艦をお買い物しているんだから。意味ないのよ。寧ろ、澄んだ瞳でうっとり和平を訴える人々が哀れに見えるわ。

一瀬 いやあ・・・毒舌ですね。

康江 私は悲嘆に暮れているの。あなた分かってないわ。

一瀬 それは失礼いたしました。

康江 とにかく、そういう状況にアキアキしていたのね。そのシンポジウム会場が代々木のカンファレンスセンターだったの。私、疲れて通路のソファに腰かけていたの。そうすると彼女が「Are you alright? (大丈夫ですか?)」と声かけてきた。

一瀬 イリカは英語が話せるんですか。

康江 あなたね、彼女はスペイン語のネイティブなのよ。アルファベットの言語なんてファミリミみたいなもんだから、ちゃんと学校で学んでいれば、ある程度、話せるようになるわ。でも、日本の学校教育はスペシヤルだからいくら勉強してもダメ。

一瀬 厳しいなあ。

康江 彼女、なかなかの英語力だったわよ。私たち、それから英語でおしゃべりしたの。

イリカ Are you alright? (大丈夫ですか?)

康江 I got tired little bit, but I'm OK. Thank you. (ちょっと疲れただけ。大丈夫。ありがとう。)

イリカ Not at all. (どういたしまして。)

康江 Where did you learn English? (どこで英語を勉強したの?)

イリカ In school, in Mexico. (学校です。メキシコの。)

康江 Ah, so, are you Mexicana? (じゃあ、あなたはメキシコ人?)

イリカ Yes, I'm Japanese Mexican. (はい、日系メキシコ人です。)

康江 That's good. You don't need to think in Japanese, the language which is full of ambiguous phrases. (まあ、じゃあ日本語で考える必要ないじゃない。結局何言ってるのか分からない言語なんだから。)

イリカ (笑う) Yes. It's always hard for me to understand the difference between words and the true intentions of Japanese. (そうですね。日本語の本音と建前を理解するには、いつも大変な目に遭わされます。)

康江 Indeed! I'm Yasue. May I have your name, please, Señorita? (本当に！私は康江。お名前を頂けるかしら、セニョリータ)

イリカ Of course, yes! Irica. I'm pleased to meet you. (もちろんです。イリカです。お目にかかれて光栄です。)

握手をする二人。

一瀬 お気に召したんですね。

康江 ええ、お気に召したわ。ユーモアのセンスがあるクレバーな女性を気に入らないはずないじゃない。

一瀬 ああ、なるほど。

康江 私退屈していたから、彼女が話し相手になってくれて本当に有難かった。彼女、親の出稼ぎで小学生の時にメキシコから来日したんだって。父親は沖縄出身だけど、母親はインディオの血が入っているみたい。だから顔がエキゾチックなのよ。残念ながら私は実際に会ったことがないんです。

康江 あら、そう。これから会えるといいわね。とっても素敵なお嬢さんよ。

一瀬 彼女、亡くなりました。

康江 ……え？ いつ？

一瀬 先月。

康江 どうして……

一瀬 建物から転落して。

康江 酔っぱらってたの？ 足踏み外したの？ 事故？

一瀬 いや・・・

康江 自殺？

一瀬 ……

康江 どうして・・・

間。

一瀬 アメリカに帰ってイリカと何度か手紙でやり取りしていましたよね。

康江 ええ、文通していたわよ。

一瀬 どうして文通を始めたんですか？

康江 ……理由なんてないわ。

一瀬 不思議なんですよね。なんだか。

康江 え？

一瀬 シンポジウムで出会った70代のマダムと20代後半の女性。片やアメリカの富裕層、片や日本に出稼ぎにきた移民の子ども。そんなに何度も手紙をやり取りしますかね？

康江 様々なギャップが友情を育むこともあるわ。

一瀬 仮にそういうことにしましょう。でも、私がイリカという名前を出した時、あなたは少し考えた。名前と人物がつながるのに少し時間がかかった。今回の来日もイリカに連絡を取る間柄ではなかったということですよ？だから、イリカが亡くなったことも知らなかった。

康江 おっしゃる通り、一時、熱心にお手紙をくれていたけど、何年か前にぷつり途絶えた。それっきり。

一瀬 何故、手紙を書く必要があったかな。彼女に。

康江 そういう遠回しな言い方止めてくれない？

一瀬 ああ、すみません。差支えのない程度でどんな内容だったのか教えて頂けませんか？

康江 プライバシーの問題だから。

一瀬 プライバシー、彼女もう亡くなりましたよ。

康江 亡くなった人にはプライバシーはないわけ？

一瀬 まったくはないとは言いませんが限定的です。墓場から訴訟起こすこと出来ないでしょう？

康江 じゃあ、かつていろんな方からもらったラブレターを燃やしとかなきやね。

一瀬 ええ、遺されたご主人のファンタジーを守るためにも・・・

康江 (笑う) あなたって人はもう。

一瀬 (笑う)

間。

康江 そう、亡くなったのね。彼女。

一瀬 ……

康江 手紙の内容は恋の悩みだった。

一瀬 お相手は？

康江 ご存知なんじゃないの？ジャーナリストさん。

一瀬 出山朗さんですか？

康江 ……

一瀬 無言は「イエス」だということを記者一年目の時に教わりましたよ。

康江 どう捉えてもらっても結構。もうこれ以上言わないわ。

一瀬 出山さんは結婚している。

康江 ……

一瀬 不倫ですよね？

康江 ねえ、彼女、敬虔なクリスチャンなのよ。知ってる？カソリック。結婚まで処女であることが求められるの。そんなこと私が言えるわけじゃないじゃない。モラルのない日本で、親切そうな新聞記者の食いものにされたんだから。あつ

一瀬 ビンゴ (笑い)

康江 そうよ、そう。出山さんよ。私が紹介したの。

康江とイリカ、笑い合っているとところに出山が通りかかる。

康江 My dear! (あら、まあ)

出山 あー、

康江 What a surprise to see you here! (こんなところで会うなんて。)

出山 ああ、えーと・・・ロングタイムノーシー(笑う)あの、ご無沙汰しております。

康江 ホントお久ぶり。今、どこにいらっしやるの？

出山 東京本社 of 政治経済部でデスクをしています。

康江 まあ、ご出世されたのね。

出山 (イリカを見て)・・・こちら？

康江 あ、こちら、南米の被爆者団体をお世話しているお嬢さん。お名前は・・・

イリカ イリカです。(出山に手を差し出す)

出山 (手を握り) 出山朗です。

二人、握手をする。

瞬間、二人の心の声が交錯する(以下のイリカと出山のセリフは二人同時に話す)。

イリカ やわらかい手

出山 琥珀の瞳

イリカ なんでだろう

出山 この目で

イリカ この気持ち

出山 男や

イリカ この手を

出山 女や

イリカ この指を

出山 人間を

イリカ 触れていたい

出山 見ている

イリカ もう少しだけ

出山 俺のことも(微笑む)

康江 さ、これであなたたちもお友達ね。

二人、手を離す。

三人、和やかに笑う。

康江 二人が付き合うことになるなんて・・・

一瀬 手紙の内容は彼とのことですか？

康江 彼女にとって初めての肉体的な恋でしかも相手は家庭持ち。苦しんでいたわね。同じクリスマスチャンの私に手紙で訴えてきたわ。

一瀬 何回くらいやり取りしましたか？

康江 さあ、3、4回だったかしら。

一瀬 出山さんとはいつからのお知り合いで？

康江 15、6年前に原爆乙女の取材で何回かお会いして親しくなったわね。

一瀬 イリカとのこと止めなかったんですか？

康江 止める？私が？どうして？いい大人が口出し？そんな野暮なことしないわよ。第一、あの二人は恋をしてたんだから。

一瀬 さっきは「親切そうな男に食い物にされたあわれな処女」って言っていましたよ。

康江 ……

一瀬 ご存知でしたよね？ きつと。

康江 何が。

一瀬 二人の関係が恋愛状態ではなかったことを。

康江 ……あなた、恋愛なんてね、本人たちの主観によるものでしょうよ。

一瀬 男がとてつもなく狡猾で巧妙にやれば、女性が思考停止に陥ることもありますよ。

「これは恋なんだよ」と耳元で甘く囁けばいいわけですから。例え現実はいくらでもだとしても。

康江 レイプ？大げさな。

一瀬 大げさではありませんよ。実際に起こっている話です。

康江 じゃあ私がそういう状態を知っていて放置していたってこと？アナタ、私を糾弾してるわけ？

一瀬 私は事実確認をしているだけです。

康江 事実確認？一体どういうご身分なの？

一瀬 先ほどお伝えした通りで、それ以上でもそれ以下でもありません。

康江 じゃあ、言うわね。たかがセックスで騒ぎ出す女がいけないのよ。ミニスカート着て、身体にフィットした服着て。それで男を誘ってなかったって、どうしてそんなこと言えるわけ？男ってそういう生き物じゃない。

一瀬 あのですね、男が制御不能になる野獣だと思ったら大間違いですよ。

康江 あなたフェミニスト？（笑う）

一瀬 フェミニストでも理想主義者でもありませんが、性欲と暴力が違うことぐらい分かります。

康江 まあ、ご立派なこと。

一瀬 私は真剣に話しているんです。

康江 ええ、私も真剣そのものだわ！あなた男だから分からないのよ。私たちがどういう扱いを受けているか。

一瀬 確かに私は男ですが、卑怯者ではありません。

康江 ……

一瀬 女性は、人間であって、男の玩具ではない。

間。

康江 ……アメリカへ行って、生きるのに必死だった。でも、私には幸福になる権利があると思ったから、何がなんでも取り戻すんだ。失った以上のものまで取り戻そうと必死だった。

一瀬 ……

康江 アメリカは、がむしゃらになって頑張る人間を見捨てないフェアな国だと思った。私は幸せになったわ。でも、時々思うの。どんなに幸せになっても、私たちの頭上に爆弾を落として皆殺しにしようとしたニンゲンがいた事実は消せないんだわ。

一瀬 ……

康江 痛みは続くのよ。ずっと……。その痛みから逃れるために「それは素晴らしい恋だった」と信じていたいと願う人間に私は「ノー」と言うことは出来ない。

問。

一瀬 今、後悔はないですか？

康江 80超えた婆さんに何言ってるのアナタ（笑う）

一瀬 すみません。

康江 前を向いて生きなきやね。前を向いて。たとえかつて自分をレイプした国にいたとしても。

一瀬 ……

康江 ……そう、彼女は死ぬことを選択したのね…

一瀬 死んでません。

康江 え？

一瀬 イリカは復活します。

一瀬、康江に一礼をしてその場を去る。

【7. ファビアン詩暗唱／ファビアンのバル】

へ比嘉ファビアンの詩暗唱く

奴らが来た。奴らが来た。

私たちの土地を荒らしに来た。

私たちの黄金を奪いに来た。

私たちの女たちを犯しに来た。

最初、私たちは気づかなかった。

ひとつ、

誠実そうな笑顔にかき消されたバーバリズム。

ひとつ、

一の葦の年に東の大地から白い神がやって来るといってお告げ。

ひとつ、

我々の敬愛すべき王の計り知れないお人好し。

まずは神話を刻んだ石板を

その次に巨大な太陽暦円盤を

続いて大量のご馳走と二番目と三番目の妻を

侵略者たちは、すべてを受け取ったが、

侵略者たちは、ちっとも満足しなかった。

ついに王は、王の証であるジャガーのマントと黄金の王冠を差し出した。

侵略者の親玉は、マントを羽織り、王冠を斜めに被って満足げに笑った。

続いて、腰からするりとサーベルを抜くと王の横にいた神官の首を刎ねた。

侵略者たちは何ごともしなかったかのように王を引きずって神殿に踏み入った。

さあ、イスパニアの祝祭の始まりだ。

私たちにとって終わりの始まりだった。

出山がファビアンのバルへ現れる。

ファビアン オラ HOLA (やあ)

出山 . . .

ファビアン ケ Qué タル tai ? (元気?)

出山 . . .

ファビアン ケ Qué バサ pasa ? コンキスタドール ¿Conquistador? (どうした? 征服者さんよ。)

出山、立ち尽くす。

【8 居酒屋で森脇一馬の告白／高木優里子からのメール】

居酒屋で向き合う、森脇と一瀬。

森脇 (封筒を差し出す) きっちり150万円

一瀬 . . .

森脇 頼んます。

一瀬 俺が持ち逃げするかもしれないよ。

森脇 一瀬さん、そんな人じゃないっす。頼んます。

一瀬 お前が返せよ。

森脇 いや〜・・・もう会うの無理っす。それに、一瀬さん、いいチャンスじゃないっすか。こいつで敵の懐に飛び込めるんですよ？

一瀬 行つてやるよ。

森脇 やった。

一瀬 でも条件がある。

森脇 なんすか？

一瀬 ホントのこと言え（森脇の両頬を右手で挟み込む）

森脇 いてえ〜いてててて

へ高木優里子からのメールへ

一瀬貴史様

お返事、大変お待たせ致しまして申し訳ございません。高木優里子でございます。

一瀬様のお申し出、熟慮致しましたが、やはりお会いしないことに致しました。

というのも、あの日以来、わたくしは心身のバランスを崩しており、外出するのもままならない日もあります。

お会いできない代わりにこうやってメールでご質問にお答え致します。

どうぞ、それでご容赦くださいませ。

森脇 そもそもイリカを連れてきたのは出山さんなんですよ。日系の女の子で地味なん

だけど色っぽいっか。ホラ外国語ネイティブの子が話す舌つたらずな日本語がまた、ね？　なんか、飲み会に来るようになって、まあ出山さんのお気に入りなんだろうなあー、ってフツーに思っていました。

優里子 私と出山さんは、私がボランティアしていた病院で出会いました。そこは、富

裕層が最期の日々を過ごす病棟で、私の祖父が病院長を務めておりました。出山さんは、かつての上司を見舞って来られていました。私は談話室でピアノを弾いておりました。出山さんは、「シューマンですか？」と声をかけてこられました。

「いえ、ブラームスです」と答えました。出山さんは「夫と愛人」と笑われました。シューマンの妻のクララ・シューマンは、ブラームスと不倫関係にあったと言われています。そのことを思い出し、私も笑いました。それが出会いです。

森脇 イリカはホント、犬みたいな女で、出山さんが電話したらどんなに遅くてもシツポ振って出てくるんですよ。ラテン系の女なんで、まあ適当に愛嬌あるし、すっげえ美人じゃないんだけど妙に魅力があるっていうか。俺も出山さんがイリカ呼んでくれたらなー、て期待するようになってたんすよ。正直。

優里子 最初は取材ということでした。美術館のカフェで待っていると出山さんが遅れてやってきて「初めてのデートで遅刻してごめんなさい」と謝りました。私が「デートですか？」と笑うと「デートに誘う勇気がなくて取材だと嘘をつきました」と大変恐縮されておられました。本当に驚きました。でも何だか嬉しかった。そのあとは美術館へ行って、イタリアンを食べて普通の「デート」をしました。

森脇 与野党が逆転した国政選挙の年があるじゃないですか。あの時、出山さんが選挙担当デスクで、俺、野党の選対委員長に張り付いてこれ以上にならない働きっぷりだったんですよ。で、予想以上の与党惨敗で俺らまさにしてやったり！最終稿出たからは出山さんの号令で編集に鍋と酒を持ち込んでどんちゃん騒ぎですよ。いつの間にかイリカもいて、まあ出山さんが呼んだらうなあ、って別に違和感なく思ってた。

優里子 次に会った時は、街中の喫茶店でした。そこで、正式にお付き合いして欲しいと言われました。手も握ってない仲です。私は30も半ばに来ておりましたので戯れに恋をしたくないとお答えし、出山さんの言う「正式なお付き合い」とは何ですか？とお尋ねしました。出山さんは、はっきりと「結婚を前提として」と言われました。私より年上でいらっしやったので、結婚のご経験は？とお尋ねいたしましたら、「既婚の身です」とさらりとおっしゃいました。

森脇 まあ、その時のチームに花田もいて・・・花田良介。正義感溢れる好青年ですよ。

知りませんか？・・・ああ、一瀬さんが退社した後なのかな・・・あいつ、早稲田政経なんですけど休学して一年、南米を旅してたんですよ。だから、スペイン語が話せるイリカに会うのを嬉しがってた。多分、イリカのこと好きだったんじゃないのかな。チリの詩人が書いた本とかプレゼントしてたし。

優里子 私は驚いて、奥さまがいらっしやる方とはお付き合いできません、と申し上げました。出山さんは俯いて「でも、今日は一緒に映画を見て頂けますか」と聞いてこられました。私は、それで出山さんが納得されるのならと受け入れました。でも、これで、会うのはおしまいにしようと思っていました。

映画は、古いフランス映画で、一人の女を巡って二人の男が登場します。一人は裕福な男で、もう一人は貧しい男です。女は父親の形見のチェロを取り戻したいと望んでいました。裕福な男は新しい高価なチェロを女に買い与えました。貧しい男はチェロを女に持ち帰るため旅に出ます。しかし、女はその間に裕福な男と結婚し、貧しい男はチェロで夜想曲を弾くというお話です。

映画の後、私は、貧しい男はなんて哀れなんだろう、と感想を言いました。出山さんは「女は裕福な男とは幸せになれないだろう。女にとって本当に大切なものを理解してないのだから」と言いました。

出山 僕は、あなたの大切なものを大切にします。

優里子 とじっと私の目を見つめました。

出山 琥珀色の瞳をしていますね、この目で、男や、女や、人間のことを見るんだろうなあ。

優里子 とおっしゃいました。私の目って琥珀色なんだわ。心が騒めき始めました。

森脇 日本の政治が変わる。そんな高揚感に包まれて、俺たちはもう興奮しきっています。たんですよ。ほら、疲れている時って、妙に性欲も昂揚するじゃないですか（笑う）明け方に出山さん、俺、花田、イリカの4人でカラオケボックスに行ったん

すよ。イリカは身体にフィットしたシャツ着てて、胸元エロいな、と思ってたんすけど、花田がね、こうガツツリ、胸見てんですよイリカの（笑う）

優里子 自分でも驚いたのですが、駅で別れる時、何だか妙な気分になって、居ても立っても居られなくなりました。

優里子 ……あの

出山 はい。

優里子 ……もう一度、会って頂けますか？

出山 え？

優里子 いえ、あの、ご迷惑なら、

出山 毎日でも会いたいです。

優里子 ……

出山 毎日でも会いたいですよ、僕は。

優里子 出山さん、

出山 今日は、あなたに指一本触れないと決めてました。

優里子 ……

出山 でも、触れます（優里子の指を一本取って優里子の手を慈しむ）

優里子 どれくらいでしょうか。1秒だったかもしれない。10分だったかもしれない。100年だったかもしれない。

出山 （優里子の手を離し）ケジメがつかなくなるので、これで…

優里子 あの、今度、いつ、

出山 また、連絡する（去る）

優里子 ……

居酒屋の騒めき。

一瀬 どうして会社やめたんだ。

森脇 俺っすか？

一瀬 お前じゃねえよ、花田だ。最後、外信部だったんだろ？花形じゃねえか。

森脇 出山さんがプッシュしたんすよ。外信部に。花田を。

一瀬 いつ頃だ。

森脇 だから、その選挙ん時。人事異動決まってたから。

一瀬 じゃあ、花田は出山さんに頭が上がんねえな。

森脇 あいつなんだろ、真面目すぎるんですよ。イリカ見てる目も切実って感じで。でも、結局、出山さんのオンナでしょ？（笑う）俺はもう、酒飲んで歌うたうだけでいいって思っていたんですけど・・・

一瀬 ……けど？

森脇 ……けどお・・・（苦笑）

一瀬 何だよ、けど、って。お前、けどって言った限りには聞かなきゃなんねーだろ、おい、言えよ。続き、けど？！

森脇 いやあ・・・ケーベツしないっすか？俺のこと

一瀬 お前の評価なんかとつくに地に落ちてるよ。

森脇 やっべえく、やっべやっべやっべ（笑う）

一瀬 森脇

森脇 言いますよ、もうく（笑う）

【9 カラオケボックス】

ソファに座りカラオケを歌っている森脇。

出山が部屋に入って来る。

イリカが部屋に入り、出山の側に立つ。出山、イリカを無視。

花田がイリカに笑顔を向ける。イリカ、花田を無視。

イリカ、出山の座るソファに腰かけ、出山を後ろから抱きしめる。

出山、イリカに向き合って抱き返す。そのまま、ソファに押し倒す。

イリカ、出山にしがみつく。

いつのまにか森脇が加わる。

イリカ、抵抗する。次第に抵抗がなくなる。

花田、茫然と眺める。

出山、花田を誘う。

花田、動けない。

自分の歌が始まり、花田がマイクを持って歌う。

出山、森脇、笑いながらカラオケボックスを出て行く。

花田、床に転がったイリカを完全無視して、切ないラブソングを絶叫しながら歌う。

歌終わり、花田、イリカを置いて出て行く。

動けなくなったイリカ、ひとり残される。

もう顔には表情が残っていない。

黒い影（チャックモール？）がゆらゆらと揺らめく。

ファビアンがその黒い影を追ってやって来る。

イリカ、ファビアン、そして、自宅でメールを打つ優里子の時空が錯綜する。

イリカ エロスと愛。その境界線上を歩いてた。

優里子 それから私は彼からの連絡を待ちました。

黒い影に導かれるようにカラオケボックスに辿り着いたファビアン、イリカの無残な姿を見つけて膝から崩れ落ちる。

ファビアン （黒い影に）チャックモール。

優里子 一人の時間は苦しかった。

イリカ 気が狂いそうだった。

優里子 でも、あのひとの言葉を信じて待った。

イリカ 恋だと信じたかったから。でも違った。恋じゃなかった。

ファビアン 生贄。

優里子 苦しい。

イリカ 苦しい・・・

優里子 あの人を愛している。

イリカ あの人を愛している？

優里子 この気持ちに間違いはない。

イリカ 間違っていた。すべてが間違ってた。

優里子 どうか、どうか、どうか、

イリカ ああ、神様、どうか・・・

ファビアン 復活する。

ファビアン、床からイリカを抱き起す。

ファビアン (イリカを抱きしめながら)
Te テ
quiero. (愛している)
キヒロ

イリカ、ファビアンの首に腕を回す。

【10. 横浜のホテルの室内と屋上】

ホテルのベッドに腰かける優里子。

優里子 横浜のホテルでした。彼が予約してくれた。山の手にある高級ホテルで、全面ガラス張りの窓から横浜市内の夜景が一望できるんです。

出山が見つめている。

優里子 初めて二人っきりで密室に入りました。私は、宝石箱のように輝く横浜の街とその向こうに蠢く海を眺めていました。出山さんは少し離れた位置で、佇んでいました。彼は、

出山 ごめんなさい。

優里子 と言った。

出山 僕には妻がいる。

優里子 何を今さら、と思った。

優里子 ええ、分かっています。

出山 分かっているよね？

優里子 分かった上で来ています。

出山 そうだよね。ごめんね、ごめん。

優里子 彼は、妻とは家庭内別居状態だということ。娘のために仮面夫婦を装っていること。もう一度、人生をやり直したいと思っていること。

出山 君と、

優里子 ……私と？

出山（同時に）君とこれから一緒に生きていきたい。

優里子（同時に）私とこれから一緒に生きていきたい、と。

同じホテルの屋上。

イリカの足首を掴んでいるファビアン。

イリカ Fabian, Gracias. (ファビアン、ありがとう)。

ファビアン Te テ quiero . (愛している)
イリカ Yo イヨ también . (私もよ。)
ファビアン Mentira . (嘘だ。)
イリカ No ノ , no lo es . (嘘じゃない。)
ファビアン No ノ te voyas . (行かないで。)
イリカ No ノ , me voy . (いいえ、行くわ。)
ファビアン No ノ lo ロ アhagas . (思い止まって。)
イリカ Me メ decidí . (決めた。)
ファビアン Por ポル favor , no ノ . (お願いだ！)
イリカ Ya ジャ me メ decidí . (もう、決めた。)

ホテルの室内。

優里子 私は窓の外の横浜の夜景を眺めていました。彼は、

出山 大丈夫だよ。

優里子 とそっと抱きしめてくれました。私はその腕に絡めとられながら、信じていい。

信じていくのだと自分に言い聞かせ、ゆっくりと彼に身を委ねました。

出山、優里子の服を脱がし始める。

ホテルの屋上。

ファビアン、イリカの足首を持ったまま。

イリカ 手を外して！

ファビアン 離さない！！

イリカがファビアンを突き飛ばす。

イリカ、フェンスの向こう側に立つ。

ホテルの室内。

優里子、出山の肩越しに窓に何か落ちていくのを見る。

優里子が悲鳴を上げる。

出山 え？

優里子 ……人……人が、窓の外……

出山 え？……え？え？

ベランダへ駆け出る優里子。

優里子 警察！警察電話して！

出山 ちよっと、落ち着いて

優里子、ベランダへ駆け出る。

優里子 落ちていった！落ちた！人が！女の人！

優里子、暗闇の中、下の植え込みを眺める。

出山、優里子についてベランダに出る。

出山 音なんてしなかったよ。

優里子 落ちてったの！！

間。

優里子 女の人だった……

出山 ホントに？見たの？

優里子 ああ……どうしよう……どうしよう……

出山 何にもないよ。気のせいだよ。

優里子 見られたわ。見られたのよ。このこと……

出山 ……見られてもいいじゃない。別に知らない人なんだから。

優里子 目が合ったの！

出山 ……

優里子 笑ってた。

出山 ……え？

優里子 私たちを見て、笑ってた。

出山 ……

ホテルの屋上。

イリカ、ファビアンの手を足で踏む。

ファビアン、痛さで叫ぶ。

イリカ ねえ、人のセックスって見たくない？

ファビアン （呻く）

イリカ 特に自分とセックスした人のセックス。

ファビアン （呻く）

イリカ そうしたらわかるはず。

ファビアン やめる…

イリカ 私がどういう存在だったのか。

建物の縁に立つイリカ。

振り返ってファビアンに笑顔を向ける。

そのまま、ホテルの屋上から身を投げる。

ファビアン、手をのばす。

下の暗闇に向かって絶叫するファビアン。

ファビアンの叫び声から少し遅れて優里子の悲鳴が重なる。

【11】ファビアンの独白その2

へ比嘉ファビアンの独白へ

イリカとは一度だけ寝た。

イリカはメキシコの日系3世だった。

私はペルーの日系4世で、私たちは同じ沖縄移住者の子孫だった。

イリカは自分にはアステカの血が入っていると言い、マリンチェの子孫だと信じていた。マリンチェは侵略者の愛人となってアステカを破滅に追いやった女。

その裏切り者の血が入っている自分は、しあわせになることはない、残酷な死が待っている、と言った。

私はそんな話よりも、イリカの耳の後ろの脂ぎったところから芳しい香りがするのをうっとり嗅いでいた。

イリカは大きなとろんとした潤んだ瞳で私を見ていたので

いいか？と聞くと、私の首筋にむしゃぼりついてきた。

セックスの最中、イリカは泣き始めた。

驚いて離れようとする、頼むからやめなしてくれ、と泣きじゃくる。

やめて、やめないで、やめないで、やめて、

男にしがみつつか、男を突き飛ばすか、二つに一つしか知らない女。

薄汚れたソファの上で、イリカの長い長い身の上話が始まった。

血の歴史。

マリンチェから続く裏切り者のサーガ。

【12. ファビアンの詩暗唱からの続き／ファビアンのバル】

出山 お前か。

ファビアン ? Que? (は?)

出山 ここそ嗅ぎまわっているのはお前か。

一瀬が現れる。

一瀬 出山さん。俺です。俺、一瀬です。

出山 ……は？

一瀬 やっぱり忘れちゃいますよね？（笑う）

出山 ……

フアビアン ? *Que quieres* ? (ご注文は?)

出山 ええ？

一瀬 あ、ハイボールでいいですか？（フアビアンに）ウイスキー&ソーダ

出山 おい。

フアビアン、注文の酒を作って一瀬に渡す。

一瀬、出山にグラスを差し出す。

出山 （グラスを受け取らない）一体何のつもりだ。

一瀬 献杯。イリカに。

出山 ……ふざけんな。

一瀬 ふざけてるのはそっちでしょ。

出山 何が目的だ。

一瀬 分かりませんか？出山さん、分かりませんか！ 俺のこの熱意がどこから来ているのか。

間。

一瀬 分からないんだ……。まあ、いいっす。俺のことなんか。忘れてもらった方がむしろすっきりする。

出山 金か？

一瀬 あ、金って言えば、森脇から150万預かってます。

出山に150万円入りの封筒を差し出す。

一瀬 手切れ金？ 口止め料？

出山 ……

一瀬 急に偉くなるんだから過去のアレコレが気になってきますよね。分かります。

出山 ……

一瀬 ほら、受け取れよ（出山の鼻の先に突き出す）ほら。

出山 ネズミ小僧か何かのつもりか。

一瀬 センスねえよ。アンタの文章みたいだ。

間。

出山 （笑う）ああ、一瀬。ああ、分かったぞ。お前だ。

一瀬 ああ、そうだよ。俺だ（笑う）

出山 ああ、そうかあ・・・すごいな、あれから何年だ。まだ、怒ってるのかお前。

一瀬 ああ、怒ってるよ。ペーパーの頃、デスクのアンタにスクープネタ盗まれた。

出山 アメリカへ渡った原爆乙女ネタ。あれは、いい記事だった。

一瀬 そりゃそうだよな、新聞協会賞もらったんだから。

出山 お前、いい記者だなあ。俺が太鼓判押してやるよ。

一瀬 地獄に堕ちやがれ。

出山 その金、お前にやるよ。慰謝料だ。少ないけどとっとけ。

一瀬 アンタ、人間じゃねえ。

出山 ああ、その台詞。花田が言ってたな、イリカが死んだ時に。

一瀬 ……

出山 花田からのタレコミだろう。

一瀬 ……

出山 アイツはそういう男だよ。臆病なくせに正義感だけいっぱしにあって。そんなもんを基軸に考えているから、ああやって精神蝕まれていくんだよ。

一瀬 俺、書きますよ。週刊誌に。あんたみたいな人間は社会にとって害にしかならぬい。

出山 書けよ。書け書け、きっちり、つぶしてやっから。

フアビアン（いきなり出山に）イリカのこと、愛していた？

出山 は？

フアビアン 愛していた？

出山 ああ、愛していたよ。

ファビアン 本当に？本当に愛していた？

出山 愛してた愛してたあ・い・し・てました！！これで満足か？

ファビアン 本当に？本当に？！

出山 ……なんだよお前！

ファビアン 私はイリカを愛していました。

出山 ……

ファビアン 私は本当に、イリカのことを…

出山 ……

一瀬 ……さ、やるか。

出山 や、やるって何を。

一瀬 イリカの葬式だ。

ファビアン 復活する。

出山 は？

一瀬 ああ、復活する。

出山 ……

【13. ピロートーク】

セックスの後、寄り添って寝ているファビアンとイリカ。

イリカ ファビアン、ファビアン。起きてる？

ファビアン (寝ぼけて) ああ、起きてるよ。

イリカ 私、今、思い出したことがある。

ファビアン 何。

イリカ 弟がいたの。

ファビアン ああ

イリカ 両親と一緒にメキシコから日本に来た時、横浜に住んでいた。日本語が分から

なくてとても苦労した。弟は、スペイン語ではすぐ利口なんだけど、日本語が分からなくてイジメられる。もともと口数が少なかったんだけど、どんどん話さなくなっって自分の殻に閉じこもっていったわ。

私は中学を出てコンビニでアルバイトを始めたんだけど、バイト代で弟に中古のカメラを買ってあげた。弟はすごく喜んで、モノクロフィルムで写真を撮ってはバスルームで現像までしていた。昼も夜も写真ばかり撮っていた。なんだか、没頭し過ぎて心配になってきた。そんな時、交通事故で死んだの。

ファビアン え？弟さんが？

イリカ 海岸通りで車に跳ね飛ばされて死んだ。頭を強く打ったんだけど、胸から下がっていたカメラは傷ひとつなかった。写真を撮りに行ったのよ。私は自分がしたことを後悔した。カメラを持たせなかったら弟は死ぬことはなかった。

ファビアン ……いや…

イリカ 弟が亡くなってしばらくしてフィルムを現像してみた。すると、海の写真好かり出てきた。朝の海、昼間の海、夜の海。月夜の海。雨の日の海。曇り空の海。そこには不思議と人は写ってなかった。海、海、海ばかり。多分、弟はもう自分が死ぬことを知っていたんじゃないのかな？ だから、とりつかれるように海の写真ばかり撮っていたのよ。ねえ、海って分かる？

ファビアン 分かるよ。海ぐらい。

イリカ そうじゃないの。海って、蛇を啜えたアステカの鷲の神様が一の葦の年に復活した海なのよ。

ファビアン ケツアルコアトル。

イリカ そう。弟は小さい頃からずっと死ぬことを怖がっていたから、復活できるように海の写真をたくさん撮ったんだと思うの。そう、だから、彼は死んだんじゃない。復活するまで海に還ったのよ。

ファビアン ……

イリカ もうひとつの秘密。私たち姉弟はアステカの血を引いている。だから復活できる。死は永遠の別れではない。

ファビアン どうして、そんな話するの？

イリカ 私、死ぬことにしたから。

【14 復活／ファビアンのバル】

音楽が変わる。

イリカが出山の前に現れる。

出山 生きてたのか？

イリカ 生きてるって思えば生きているわ。あなたの心の中。思うだけで私はいつでも蘇る。復活ってそういうこと。マジックでもなんでもない。私が死んでから、あなたは私のことを思い出さなかった。だから、私はあなたの前に現れなかった。それだけ。

間。

イリカ (微笑んで) やっと会えた。

出山 . . .

イリカ 私のこと、愛してた？

出山 . . . 愛してたよ。

イリカ (笑う) 嘘。

イリカ、出山に近づく。

出山、イリカに顔を向けたまま後ずさりする。

イリカ ねえ、死んで分かったことがある。死ぬことは祭りなの。

出山 祭り。

イリカ そう、祭りの熱狂をぐり抜けて死ぬの。セックスと似てるよね？

出山 . . .

イリカ あの女もそうだった。興奮しているのに死んでいるような顔してた (笑う)

イリカ、止まる。

出山も止まる。

イリカ 彼女の魂も殺そうとしたの？

間。

出山 俺をどうしたい？

イリカ、出山に手を差し伸べる。

イリカ バモス ア Vamos バイラール a bailar . (踊りましょう)

出山、動かない。

イリカ、出山に手を伸ばす、手を伸ばす、手を伸ばす。

出山が、イリカの手を取り、身体を引き寄せる瞬間、暗転。

明転。

イリカはいない。

床に蹲る出山。

その出山を見下ろす一瀬、ファビアン。

音楽が激しくなる。

出山、動かない。

誰も動かない。

おしまい